

視 点

奇跡がくれた宝物 — 「いのちの授業」 —

小沢 浩¹⁾, 田中総一郎²⁾

— 「いのち」ってどこにある? —

頭かな? 心臓かな? 体かな?

— 「いのち」って誰のもの? —

ぼくのもの? わたしのもの?

I. はじめに

この物語は一つの電話から始まった。わが母校天城中学校の校長からだった。

「愛することからはじめよう」(大月書店)¹⁾。この本が私と天城中をつなげてくれた。この本は日本で最初の重症心身障害児施設の園長となった小林提樹のことを紹介した本である。その本を読んだ校長が、母校での講演会を企画してくれたのであった。私はそのときに、「いのちの授業」をさせてほしいとお願いした。

新聞やテレビでは連日、いじめや自殺のことが報道されている。平成23年は1,029人の学生・生徒が自ら命を絶った²⁾。「いのち」って何だろう。

II. 「いのちの授業」の方法

「いのちの授業」は、田中総一郎の方法に従った³⁾。

- ① 自分が生まれたときのことを家族1名からインタビューする。
- ② インタビューの内容を作文にまとめる。
- ③ 「いのちの授業」で作文を紹介する。
- ④ 障害児の紹介および体験をして障害について考える。

⑤ 授業終了後自宅で作文を音読し家族に返す。

⑥ 授業の感想を書く。

III. 生徒の感想文(抜粋)

前置胎盤という状態でもともと出血しやすかったので、生まれる1か月前からずっと入院していたそうです。

お母さんは1リットル以上も出血してしまい、血圧も下がったりして生まれた瞬間のことは、意識がもうろうとしていてよく覚えていないようです。でも、分娩室から病室に運ばれる途中、元気に動いている僕を見て、とても安心したそうです。

僕には、姉がいます。姉が生まれてから僕が生まれるまでの間に、お母さんは3回流産してしまったそうです。この世に生まれてくることができなかつた命の分まで僕は一生懸命生きていきたいです。

わたしが生まれたのは朝だったそうです。病室から見た空が茜色になっていて、太陽のようにあたたかい人になってもらいたいと思ってこの名前(あか音)をつけてくれたそうです。

病院で、「子どもができにくい」と言われ、目の前が真っ白になった。それから、1年間病院に通い、念願の子どもを授かった。もしかして、子どもは無理かもと思っていたのですごくうれしかった。

Let's Think "Life"

Hiroshi OZAWA, Soichiro TANAKA

1) 島田療育センターはちおうじ神経小児科

2) 東北大学小児科

別刷請求先: 小沢 浩 島田療育センターはちおうじ 〒193-0931 東京都八王子市台町4-33-13

Tel: 042-365-9394 E-mail: h.ozawa@shimada-ryoiku.or.jp

私が生まれた時、頭がとんがっていて母がびっくりしたって言った。宇宙人かと思ったって言った。少しショックでした。

お母さんにその話を聞いていた時に涙を浮かべていたのを見て、とても僕を大切にしてくれたんだと思いました。

お母さんはよく怒るから苦手なんだけど、そんなお母さんが大好きです。

二人目の赤ちゃんを望んでいたお母さんはホルモンの病気でお医者さんに無理だと言われていました。東京の病院に通いやつと授かった赤ちゃんが紗矢香です。出産までもトラブルの連続でした。妊娠10か月の時に腎炎になり高熱で入院、お腹の子は大丈夫か不安で、どうかお腹の子は助けて下さいと祈り続けました。出産のときには、破水してしまい、無事に生まれるのか本当に心配しました。いろいろなことを乗り越えての出産だったので、本当に無事に生まれてくれてありがとうと心の底から感謝しました。産婦人科の先生が、妊娠して無事出産するのがあたり前のように思われがちだが、無事に生まれてくるというのは、それは奇跡なんだと話してくださいました。だから、あなたたちが生きているということは、たくさんの奇跡が与えてくれたかけがえのない宝物なのです。その尊い命を大切にして下さい。

IV. 作文後の説明

- ・発展途上国では妊娠や出産が原因で毎日1,000人以上の母親の命が失われています。
- ・アメリカでは、10代の少女の6人に1人が妊娠しています⁴⁾。

「生まれてくれてありがとう」

ここにいるみんなの家族の思いです。

「産んでくれて、育ててくれてありがとう」

ここにいるみんなの思いです。

いのちは自分だけのものではない

みんな愛される存在である

V. 「障害」の紹介（抜粋）

1. 障害をもっている人の立場を想像する

①天井を見て顔を左右に動かしてみる。これだけしか見えない世界だったらどうだろうか。ベッドで寝たきりの人は、この世界しか知らない。だから、ベッドを起こしたり、車椅子で散歩したりすることが大切である。

②目をつぶって立って体を一回転させて、もう一度座ってみる。立って回って座るという動作が、目をつぶるだけでこんなに難しくなるのである。

2. 視覚障害と言われている人の話

夜、電気をつけていないで過ごしていたのだが、そうすると訪れた人がいないと思って帰ってしまう。仕方ないので電気をつけることにした。

「夜、電気をつけないと生活できない人たちって不便ですよ。」と言っていた。

視覚障害と言われる人たちは、点字が読める。われわれは点字が読めない。われわれが障害と思っていることは、われわれと違うというだけで決めてしまっているのではないのだろうか。目がみえなくても、暗いところで生活でき、点字も読める。そんな才能の持ち主なのである。

3. もらってくれてありがとう⁵⁾

桜の花びらが散り、若葉が顔を出し始めたころ、私の娘は生まれた。初めて授かった子であった。生まれた翌日に病棟に行くと、

「先生、おめでとう。男の子？女の子？」

Aちゃんのお母さんは私の娘の出産をととても喜んでくれた。Aちゃんは生まれてからほとんどを病院で過ごし、気管切開をして人工呼吸器をつけて日々過ごしていた。なかなか外に行くこともできない。お母さんは毎日病院に通っていた。Aちゃんは元気にそして一生懸命に生きていた。しばらく娘の話をした後、少しの沈黙の後、

「もしよかったらうちの子の洋服をあげたいんだけどもらってくれる？」

とお母さんから提案があった。Aちゃんはいつもブランドの服を身にまとっていた。

「ありがとう」と私がお礼を言うと、そのお母さんは更にこうつけ加えた。

「先生、家に帰って奥さんに聞いてからにした方がいいわよ。」私は、その言葉の意味がわからなかった。家に帰り早速妻に服をもらえる話をすると、

「あら、嬉しい！」

と妻も喜んでくれた。さっそく次の日に病院でAちゃんのお母さんにそのことを報告すると、お母さんは、急にうつむいて手で顔を覆った。そして、ささやくような声で

「もらってくれてありがとう。」と言った。その手の奥には、涙があふれていた。

しばらくして、お母さんはぼつりぼつりと話し出した。涙の理由（わけ）を…。

「友だちに赤ちゃんが生まれた時にね、Aの服をあげようとしたの。そのときに、やんわりと断られちゃって。だから、それから怖くなっちゃってね、ず～っと押入れの奥にしまっておいたの。でも、先生だったらもらってくれるかもしれないと思って、勇気をふりしぼって言ってみたの。」

1週間後の土曜日、誰もいない薄暗いロビーで待っていると、お母さんがそのベビー服を持ってきてくれた。両手いっぱい段ボールを抱えて…。その段ボールを置くと、

「待っててね。まだあるの。」

と言って、また駆け出して行った。もう一度段ボール箱を抱えて戻ってきたお母さんはニコニコして段ボールを開けた。段ボール箱一杯に入った色とりどりのベビー服は、お母さんがもう一度洗濯をしてアイロンをかけたのであろう。きちんとたたんでいて、みんな新品のようにきれいで、そして温かい輝きを放っていた。再び服として生を受けたことを喜んでいるかのよう

に。「お下がり」。私たちは、子どもの頃、お兄ちゃんやお姉ちゃんが着てきた服を順番に着て、それを親戚や友だちのお子さんにあげたりしたものである。服をあげるときには、そのお子さんの健やかな成長を祈り、そんな心も一緒に贈るものである。Aちゃんのお母さんは、誰よりも強くわが娘の成長を祈ったことであろう。私の娘たちはそんな想いのいっぴいつまった服を着て成長した。そして今日も生意気な口を利きながら元気に過ごしている。

この出来事は、私が「障害とは何か？」考えるきっかけとなった。私は、日々、障害児という子どもたちを診ている。だから、服をもらうことも抵抗がない。

この子どもたちの素晴らしさをいっぴい教えてもらっているからである。でも、私がこの仕事をしていなかったらどうだったろうか。私も同じように断っていたかもしれない。Aちゃんのお母さんも同じであろう。断った人、それは私なのかもしれない。だからこそ、このことを教えてくれる子どもたちに感謝するのである。

この子は私である

あの子も私である¹⁾

4. 「幸せ」について

「幸せ」について考える。勉強ができていい大学入っていい会社に入れば「幸せ」なのだろうか。仕事につまずいて引きこもってしまったり自ら大切ないのちを絶ってしまったりする人がいる。

では、お金持ちが「幸せ」だろうか。生活に必要なお金はないと困るが、あり余るだけのお金が人を不幸に陥れることもいっぴいある。お金が人生の目的になってはいけない。お金は何かの目的を果たすための手段として必要なのである。

私の外来には障害と言われる個性を持った子どもたちを中心として本当にうらやましいと思うほのほとした家族がいっぴい訪れる。そこで改めて「幸せ」について考える。人間はみな平等。人はそう言う。でも本当にそうなのだろうか。かけっこが遅い人はどんなに頑張ってもかけっこが一番になることはなかなかできない。人の才能は平等ではない。でもその中から「幸せ」を作っていくのである。掴み取っていくのである。自分の置かれた環境の中で、感謝の気持ちを育み「ありがとう」を伝え、その中から「幸せの形」を作っていくのである。われわれはそのお手伝いをさせていたでいるにすぎない。

5. YUMIEさん

読売新聞のYUMIEさんの記事を紹介する⁶⁾。

YUMIEさんは生まれつき耳が聴こえなかった。聴力は補聴器がなければ、ジェット機の轟音がやっとわかる程度。補聴器をつけても完全には聴き取れず、小さいときは常に人の陰に隠れている子どもだった。聴こえない世界に閉じこもらないように、お母さんは発音の仕方を根気よく教え、小学校から聾学校と並行して健常児が通う学校にも行かせた。耳のことでいじめられることもあった。そんなときには、お母さんは、

「他の人にできないことを見つけて見返してやりなさい。」と厳しい言葉をかけた。

「ラーメン食べたいな。」小学校4年のとき、教師が声を出さずにつぶやいた言葉が突然わかり、そのころから相手の話すことが理解できるようになり徐々に人と交わるようになっていった。

18歳、将来の目標を持たずにいた専門学校生のときに、ボディボードに出会う。ボディボードとは、足ひれ（フィン）をつけて、長さ1mほどのボードに腹ばいの姿勢になって波に乗る競技である。友人に誘われ、見よう見まねで波に乗ると心地よく「霧がぱつと晴れたような感覚」を味わった。「海は平等、誰も払いのけない。この世界で頑張ろう」とプロになる決意を固めた。その2年後、耳鼻科から人工内耳手術を勧められる。手術をすれば聴こえるようになる。でも激しい運動ができなくなる。YUMIEさんは、今のままの自分でいることを選ぶ。29歳の時、2度目の挑戦でプロテストに合格。難聴は自分をここまで頑張らせてくれた「ダイヤモンドのような宝物」と聾学校の後輩たちに伝えている。

105歳で亡くなったおじいちゃんの音松さんは、「誰も恨んじゃだめだ。その人の声が聴こえなければ、心で聴け。」いつもそう言い続けてきた。おじいちゃんが亡くなり、部屋を整理していたら電話帳を見つけた。何本も線が引いてある電話帳。耳鼻科の欄であった。YUMIEさんは、色々な病院から「音松さんいますか。」とよく電話があったことを思い出した。YUMIEさんの耳を治そうと必死だったおじいちゃん。YUMIEさんは、その電話帳の前であふれる涙を止めることができなかった。

「何かを失えば、何かプラスになる。本当の幸せは、悲しみの中にあるのかもしれない」今、YUMIEさんがみんなに伝えている言葉である。

VI. 感想文（抜粋）

いろんな人の作文を聞いて、やっぱりこの命は大切にしないといけないとすごく思いました。障害がある人も、一生懸命頑張って生きているのだから、わたしも産んでくれた母や、ここまで育ててくれた家族やみんなに感謝して、この命をむだにしないようにして、生きていこうと思いました。しかし、わたしは障害がある方が、すこしこわいと思ってしまいます。でも、その人も人間です。だから、普通に接していこうと思

いました。命の大切さを忘れず、これからも頑張っていきたいです。

目をつぶって立って、1回まわって、座るという動作をしたときは、すごくこわかったし、立ったときよろけたり、座るときもどこに座ればいいのかわからなくて本当にこわかったです。だから、障がいのある人はこんなにこわいおもいを毎日してるんだなと思いました。きっとわたしにできることはあまりないと思うけど少しでも障がいのある人がよろこんでくれたり幸せな気持ちになってくれたらいいなと思いました。あと自分の命をこれから大切にしようと思いました。

私の母に宇宙人と言われて、ショックだったけど、その話を聞いた時には、やっぱり感動したって言った。

そして、今日のお話を聞いて、どのお母さんもそう思っているんだなあと思いました。

私は今まで、しょう患者というと「かわいそう」という言葉がうかんでいました。でも、今回「命の授業」でしょう患者も仕事を一生懸命やっているというのを知り、しょう患者は「かわいそう」ではなく「すごい」と思いました。

私たち普通の人より困難なことが多い中、あきらめず働いていたからです。そして私たちと同じ生徒の生まれを知り、お母さん、お父さんと助け合って生きていこうと感じました。私にはお母さんがいませんが、産んでくれたことに感謝して、生きたいです。「命の授業」をやっていなかったら、親へのぼう言が大きくなっていたと思います。改めて家族の大切さを知ることができました。

今回の授業を受けて、障害をもつ人も、私たちとあまり変わらないということがよくわかりました。同じ人なんだから、同じように接していけばいいんだということが改めてよくわかりました。私の妹は、軽いけど障害もっていて、ふつうの子より少し遅れているため、修善寺中学校に行っています。昔何度か妹が少し遅れていることで他の人からかわれたことがあって、私はとても悔しかったです。なので、今回の授業を受けて、改めて障害があってもなくてもあまり変わらないということを知ることができて、うれしかった

です。

授業の中で、他の人たちが生まれたときの話を聞いて、生まれてくるために、お母さんが本当に頑張ってくれたおかげで、生まれてこれたんだなあと思いました。

産んでくれたお母さんのためにも一生懸命生きなきゃいけないんだと思いました。

—「いのち」ってどこにある？—

すべてにある。ほくにも、わたしにも、鳥にも、虫にも、花にもすべてにある。

—「いのち」って誰のもの？—

みんなのもの。お母さん、お父さん、おじいちゃん、おばあちゃん、ほくを育ててくれたみんなのもの。

文 献

- 1) 小沢 浩. 愛することからはじめよう—小林提樹と島田療育園の歩み—. 東京：大月書店, 2011.
- 2) 読売新聞. 2012.3.9.
- 3) 田中総一郎. いのちを大切にすってどうということ？ チャイルドヘルス 2012：15；746-747.
- 4) 日本テレビ. 世界一受けたい授業. 2012.1.7.
- 5) 小沢 浩. もらってくれてありがとう. 小児科診療 2012：75；1766-1767.
- 6) 読売新聞. 2012.1.4.